クラス	Q104	担当教員	大饗　広之
テーマ	現代青年の心理　＆　心理療法的アプローチ		
著書･論文 研究課題等	◆　「豹変する心」の現象学―精神科臨床の現場から―（勁草書房、2009） ◆　「なぜ自殺は減らないのか―精神病理学からのアプローチ」（勁草書房、2013） ◆　「解離の病理―自己・世界・時代（共著）」（岩崎学術出版、2012）		

ゼ ミ ナ ー ル 概 要

キーワード：青年期、アイデンティティー、解離、トラウマ、心理療法

目的、内容、方法：

思春期・青年期の心は今どうなっているのか、そしていったい心理療法はそこにどうやってアプローチするのかといったことがこのゼミのテーマです。ただしいくら小難しいことをいっても「自分のこころ」に向かう態度がなければ（フロイトもいっていますが）心理療法をおこなうもできないし、他人のこころについて知ることもできません（心理療法は人のこころについて考えることを通じて自分のこころに向かうという相互実践にほかならない)。ゼミではお互いのテーマを持ち寄りながら、ディスカッションを通じて心のメタレベルを扱うことを学んでいきます。テーマは自由に漂流していき、そのなかでそれぞれが研究テーマを絞り込んでいきますが、はっきりいって 2 年というのは一つの研究テーマに取りくむにはあまりにも短い期間です。せいぜいめざすべきことは、各々が取り組むべきテーマの入り口に立つという程度でしょうが、本当に取り組むべきテーマを手にしたなら、大事なことはそれを煮詰めていく過程です。それは気のきいた統計処理などよりも、不完全でもどれほど自分のテーマに興味をもって取り組むかにかかっています（たとえば院の入試などの評価でもそれは同様です)。はじめから方向性を定めてのぞむ必要はありませんが、少なくとも発表や相談、あるいは自己開示にはみずから積極的にとりくむことが参加条件です。とくに心理療法家を志す人であれば、①自分のこころに興味をもっていること、②こころを扱う上での倫理（秘密保持）をわきまえていること、③集団状況を自己開示の場とすることを試みることが最低条件です。ゼミという閉鎖的（中間的）な集団状況を、自分を知るための場として利用する気でのぞんで欲しいところです（そういう機会は今後の人生でもそうないでしょう)。心理療法は「三つ子の魂百まで」という固定観念をうちやぶっていく営みですが、そのためにも多少の心理的抵抗も覚悟しなければならないということです。

担当教員からのメッセージ

内面について考える（内省する）姿勢のない学生にはこのゼミはおもしろくないこと請け合いです。心理学科には入ったけれど、自分のこころについてはサッパリわからなかった、自分はぜんぜん変わらなかったという学生がけっこう多いようですが、まあそれでは時間と金をドブに捨てているようなもの。自分のこころを知るには「鏡としての人」が必要であり、そのためのゼミをとことん利用すればいいわけです。上にも書いたとおり、このゼミは討論中心で、学生の自主性に委ねられるところが大きいので、少なくともいろんなことに疑問を抱き、積極的に議論に参加していく姿勢が最低の条件です。そして自分の抱いた疑問に執念深くコミットしていけばけっこうおもしろくなるものです。単位取得については、とくに 3 年時には出席を厳密に評価します。アソビ感覚も大事ですが、お気楽にすごしたい仲良しグループの人にはまあ向かないでしょうね。